American Association, 1962. xi＋367p.

ラオスの出版事情について詳しいことは知らないが，ビエンチャンの書店の店頭に並ぶラオス語の書物は数えるほどしかない。ほとんどがタイ語・英語・中国語またはベトナム語のものである。そのわずかなラオス語書物のうちでこの両書は最も価値のあるものである。

ラオス語の辞書としては，これまでにも Cuaz の仏＝ラオ辞典や Guignard のラオ＝仏辞典など主にフランス人の手になるものがずいぶんとあって，それぞれ特徴があるので現在でも利用価値は十分にあるけれども，この両書の意義は新しさと現地の出版ということにあるであろう。前者はラオ＝ラオ辞典で，教育省編纂であることからいわばラオスの標準国語辞典というべきものであり，後者はラオス語で英語を説明した形式の英＝ラオ辞典である。どちらもラオス人のための辞書という体裁をとっているから，われわれには間接的な利用しかできないが，語数にしても前者が1万近く，後者が6,000近くもあるし，従来の辞書とちがって少なくとも綴字のうえではこれを現在の標準ラオス語と認められるから，われわれとしても利用価値は低くない。

ことに後者の英・ラオの方は，実際にはわれわれがラオス語を引く辞書としても問題なく使えるもので，英語のラオス訳は正確のようであるし，タイプ印刷も鮮明で使いよい。もちろん，たとえば，go *v. i.* に対する pai, ôk pai, sadet などの用法の相違まで求めることができないのは仕方あるまい。

しかし前者のラオ・ラオ辞典は見出語の配列が極めて不便である。ひとつの子音字について，子音字＋母音記号だけの音節からなる（またはそのような音節を頭にもつ）単語を掲げ，その後に子音字＋母音記号＋子音字のものをかき，しかも母音記号の序列より末尾の子音字の序列を優先させている。(e.g. kāp は，kā の次でも kān の次でもなく kap の次に見出される。）これはやはり現行のタイ語辞典の配列法にならうなりして，もう少し便利にしたいところである。

また，両書とも本来の目的からいって当然ではあるが，ラオス語の発音（音素形式）が示されていないこともわれわれにとっては不便である。ラオス語の正書法ではタイ語のような伝統的な不規則綴字といわれるものは整理されていてさほど問題はないとはいえ，われわれの知りたいのはやはり実際に話されるラオス語の形である。

ともかく外国人研究者のための本格的なラオス語辞典が今後ただちに現れることはあるまいから，少なくともしばらくはこの両書が重宝なものとなることは疑いないだろう。　（三谷恭之）

天野利武編：チッタゴン地方の丘陵人—大阪大学東パキスタン総合学術調査隊報告書—1964, ii＋316p.

東南アジアから南アジアにかけて旅したものにとって，チッタゴン丘陵地帯やアラカン山脈一帯がこの2地域を分ける地理的分水嶺であるのみならず，文化的分水嶺でもあることを知るであろう。ビルマからはじめてベンガルに行ったものは，そこで〝本格的な〟異国情緒をおおいに見いだすであろうし，南アジアや西アジアの旅につかれたものにとっては，ラングーンに着くと，そこに〝ほんとうの〟東洋を発見し，心にいい知れないやすらぎを感じることであろう。人間，風俗，習慣……あらゆるものがこのあたりで一変する。

本書は1964年2月20日から3月31まで41日間にわたり，東パキスタンのチッタゴン丘陵地帯で調査をおこなった大阪大学東パキスタン総合学術調査隊の報告書である。

インドのアッサム州，ビルマの中西部にかこまれたこのチッタゴン丘陵地帯にはチャクマ族をはじめとするいろいろな山地民が住んでいるが，この報告書ではこれら山地民と同時に附近に住んでいるベンガル人をも含めて，心理学，人文地理学，言語学，形質人類学，医学，薬学などの立場から調査研究がおこなわれている。内容は (1)チッタゴン丘陵地区の人口，(2)チッタゴン丘陵地区の集落，(3)丘陵人の社会と文化，(4)親族関係用語からみた丘陵人，(5)チャクマ族の言語とマルム・ムロ語彙集三題，(6)東パキスタン丘陵種族の文化変容にみられる象徴知覚の研究，(7)東パキスタンにおける青年の一般的生活意識について，(8)東パキスタンの人類学的研究，(9)東ベンガリ頭蓋について（予報），(10)チッタゴン丘陵地区のアルコール蒸溜法について，(11)東パキスタンの医療と薬物について。以上のように11の論文は自然科学や社会科学の広汎な範囲にわたっている。

内容を見ていると，チッタゴン丘陵地帯の持つ学問

的魅力がたんのうされ，またそこで調査研究のできた隊員の方々をたいへんに羨しく思う。それに，短時間にしてはかなりの量のデータを集め，その努力を多とする。

しかしながら，まことに残念に思うのは，調査の期間が短いことと，出版の都合で資料の分析に時間が十分にかけられなかったことではなかろうか。たとえば，一例をあげると，チッタゴン地方の丘陵人が竹文化を持っているという客観的な事実にはまったく異議をさしはさむ余地はないけれども，竹の持つ特質が〝丘陵人のパーソナリティーをきわめて象徴的に示唆するものと思われる〟という記述になると，いささか無理があるのではないかと思われる。筆者は竹と丘陵人の持つパーソナリティーの比喩として使ったのだとは思うけれども，自然とパーソナリティーをむすびつけるのには，労働過程のようないくつかの中間項が必要なのではなかろうか。

また，この種の調査報告書には調査隊の踏査の全体を示す地図と，簡単な隊の日誌があれば，読者にとってたいへんに便利である。

以上，若干の問題はあるにせよ，この報告書はチッタゴン丘陵地帯研究のわが国におけるパイオニア・ワークであり，貴重な文献である。それゆえ，この報告書をもとに，南アジアと東南アジアをむすぶ学問的に重要なこの地域の調査研究がさらに発展することを心から望むのである。　（飯島　茂）

Richard B. Noss : *Thai Reference Grammar,* Foreign Service Institute, Department of State, Washington, D. C. 964. iv＋254p.

タイ語について書かれた書物は，タイ国にて行なわれて来た伝統的な文法や純粋に実用的な目的のみのために書かれたものとは別に，現在の記述言語学の立場から書かれたものとなると，ほとんど皆無と言ってよい程である。

本書はその様な数すくない書物のひとつである。と云うよりも，一定の方法をもって，タイ語と言う一つの言語の構造全体を記述しようとする書物としては，唯一のものではなかろうか？　この点においても，本書はアメリカにおけるタイ語研究の現在の水準を示すものと言ってよいであろう。本書であつかわれている言語はバンコックを中心として話されている標準タイ語であり，著者が合計7人のインフォーマントを使ってアメリカ及びタイ国で四年間をついやしてまとめあげたものであって，それだけに詳細を極めたものである。本書の構成は，まず Introduction，次いで Phonology，Morphology and Syntax，最後に Lexeme Classes を論じ，この Lexeme Classes が Free Lexeme Classes と Bound Lexeme Classes とに大分される。これ等全体を通じて一定の方法論でもってつらぬかれている。

Phonology では，Phonemes を大別して Syllabic Phonemes と Prosodic Phonemes とする。前者には Consonants，Vowels 及び Tones があり，後者には Stress，Rythm，Intonation が含まれる。表記法は Haas 式の音素表記が用いられているが，Stress，Rythm，Intonation を考りょに入れた点で，本書の方が Haas よりも，より進歩していると言ってよいであろう。また従来タイ語には五つの Tones が認められて来たに対し，本書では六つの Tones を認めている。すなわち，これまでの(1)中平型，(2)低平型，(3)下降型，(4)上昇型に対し，(1) Plain High，(2) Constricted High，(3) Mid，(4) Low，(5) Falling，(6) Rising を設定する。しかし，この High に Plain High と Constricted High との二つを認めることには疑問を感ずる。Plain High Tone を持つとされている Morphemes を見ると，/chan (Plain High) <一人称代名詞>，/khaw/(Plain High) <三人称代名詞>，/maj/(Plain High)<疑問を表わす morpheme> などのある特別なものにかぎられており，数的にも少ないことがわかる。したがって，わざわざ Tone を一つ多く設定するよりも，Prosodic Phoneme と言う観点から処理する方が，より賢明だと考えられる。

Morphology and Syntax においては，Prosodic Morphemes, Morphemes を論じ，ついで Lexemes の構成，Syntactic Construction について例をあげて説明して行く。最後に Lexeme Classes をあつかっている。上にあげた色々な点について，今ここで検討している余裕はないけれども，この様な現代記述言語学の方法によるタイ語の文法が現れたことは，タイ語研究にとってよろこぶべきことである。本書で用いられている様な方法論に賛成するか否かは別にして，一度は精読すべき書である。　（桂　満希郎）